

2021年12月19日 クリスマス礼拝 アドヴェントⅣ

説教題「愛あるところに」ヨハネ 3章 16～17節、13章 34～35節

主任牧師 加藤 誠

「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」(ヨハネ 13章 35節)

クリスマスおめでとうございます。今年のクリスマス前は東京の感染者数が倍々で増え始め、キャンドルサービスは急遽、共に集まることを中止してオンライン配信となったわけですが、今年はなんとかこのように新しい礼拝堂と一緒に集って、クリスマスを迎えられることを心から神さまに感謝します。けれども世界中では感染者数が再び拡大し始めています。ワクチンの行き渡らない国も多いと聞いていますし、少しでも感染が収束に向かうように引き続き祈っていきたいと思います。

さて、イエス・キリストは二千年前、神さまの愛と平和を携えて生まれてくださいました。その主イエスからほんとうの愛と平和を教えていただいたはずなのに、お互いに愛し合うことも平和をつくりだすこともなかなかできずに、相も変わらず憎しみ合い、けなし合い、悲しみをつくりだし続けて、何の進歩もできていない私たちであることを示されます。

大井教会の聖書日課では、今、ちょうどマルコ福音書の受難物語を読むようになっているのですが、実は主イエスが活動を始めたその最初（3章くらい）から指導者たちの敵意が向けられて、「あいつは俺たちの権益を脅かす危険な奴だ。殺してしまおう」と相談がなされている場面に考えさせられます。こんなに簡単に「殺す」という言葉が口から出ていいものかと。あるいは主イエスの裁判の場面で、総督ピラトは「自分はこの男に死罪にあたるような罪は見つけれない」と言いながら、民衆が騒ぎ出すとあっさりと言葉を翻してイエスを十字架につけていくわけです。ピラトにとっては「正義」はどうでもいい。ローマ皇帝から「無能な管理者」と言われぬように、民衆が無用な騒ぎを起こさずにくれたらそれでいい。そうして白が黒に仕立て上げられ、黒が白と言いくるめられていく社会のありように、暗澹たる思いでマルコ福音書を読むわけですが、しかし、今の日本も実は二千年前のユダヤとそれほど変わっていません。新聞に「殺す」という単語の記事が載らない日はないし、国会も裁判所も実にいい加減で、「真実」は歪められて闇に葬られていく。真面目に生きようとする人ほど失望し、暗澹たる思いにさせられていく。本質的には、二千年前のユダヤの状況と何も変わらないわけです。

そういう意味では、せっかくイエス・キリストが生まれてくださったのに、二千年の間、私たちはほとんど何も成長もできていない。イエス・キリストが無力なのでしょうか。聖書の神を信じる信仰は空しいことなのでしょうか。それとも私たちの罪があまりにも深いのでしょうか。このような世界において、私たちは何を希望に生きていくことができるのだろうかと考えさせられます。

ところでクリスマスは、イエス・キリストの愛を指し示す素晴らしい文学作品をたくさん生み出してきました。今日は今から百五十年ほどのロシアの作家であるト

ルストイの書いた「愛あるところに神あり」というお話を紹介したいと思います。日本の教会では「靴屋のマルティン」という題名でよく知られてきたお話しです。

マルティンは靴屋で、その良心的で誠実な仕事ぶりで町の人びとから信頼されていました。熱心なキリスト教徒で毎週欠かさずに教会に通っていました。けれどもそのマルティンを大きく変える悲劇が重なります。まず愛する妻が病死し、残された三歳の男の子を男手一つでやっとの思いで育て上げたものの、いよいよ一人前になるという矢先にやはり病死してしまいます。マルティンは悲嘆に暮れて、がっくりと力を落としてしまいました。そして神に不平をぶつけ始めます。

「神さま、なぜあなたは年老いた私の命ではなく、これからという可愛い一人息子をお召しになったのですか」と。マルティンは教会にも行かなくなりました。

ある日、そのマルティンのところに巡礼の老人が立ち寄り、愚痴をこぼし、神を責めるマルティンにこう言うのです。「マルティン、おまえの言うことは間違っているよ。われらには神さまの仕事の良し悪しを言う資格はないのじゃ。おまえの息子が死んだのも、お前が生きているのも、みんな神さまの思し召しじゃ。それをおまえが落胆しているのは、おまえが自分だけの喜びのために生きようとしているからじゃよ」。「では、どう生きればよいのですか」。「神さまのためさ、マルティン」。「神さまのため？ いったいどうすれば、神さまのために生きることができるようになるんですかね」。「それはキリストさまがちゃんと教えてくださっている。お前は字が読めるじゃろ。福音書を買って読みなさい」。

老人に言われたとおりに福音書を少しずつ毎日読み始めると、ある夜、マルティンは「明日、君の家を訪ねるよ」というイエスさまの声を聴きます。翌朝マルティンは、シチューとパン、そしてお茶を用意してイエスさまの訪問を待ちました。ところがイエスさまが訪ねてくることはなく、雪かきの老人、乳飲み子を抱えた女の、リンゴ売りのおばあさんからリンゴを盗もうとした少年などに出会い、用意していた食事やお茶を振舞っているうちに一日があっという間に過ぎてしまうのでした。その夜、「昨日の夜のイエスさまの声は空耳だったのかなあ」とつぶやくマルティンの心に主イエスが語りかけます。「今日はありがとう。君が知らずにお世話をした一人ひとりが、実はわたしだったのだよ」と。マルティンの心に不思議な喜びがあふれていくところで、このお話しは終わるのです。

さまざまな不条理があふれる世界。貧しい者がさらに貧しくさせられていく世界。神さまなどどこにおられるのか、わからなくなる世界において、馬小屋に生まれ十字架への道をまっすぐに歩まれた主イエスは今日も生きて働いておられます。私たちが自分の幸せだけを求めるのではなく、神さまの愛を少しでも分かち合おうと隣人との関わりを大切にしていって、そのところに主イエスは生きて働いておられる。その主イエスが生きておられるゆえに、この世界は決して絶望の闇に閉ざされているのではなく、希望の光に照らされていることを聖書は教えてくれています。このクリスマス、「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」という「愛の灯」を大切に受けていきたいのです。